

テキスト 創世記 37章1～36節

〈背景と文脈〉

ヨセフ物語はど神の摂理を確信させてくれるものではない。創世記37章から50章まではヨセフに関する記述である（ただし38章にはユダに関する記事が挿入されている）。一見、数奇な運命に翻弄されているかのような生涯であるが、神の摂理によって支配されていたことが、読み進めていくなかで見えてくる。ヨセフはヤコブ（ヨセフの父）の一族の命を救うための神の器だった。ヤコブは神の契約の民となったイスラエル民族の先祖であり、この民からメシア、イエス・キリストがお生まれになった。

37章は、50章まで続くヨセフ物語の序論であり、結論へ向けて伏線が敷かれている箇所である。

〈ヨセフの家庭環境と兄たちの憎しみ（37:1～11）〉

主人公ヨセフはヤコブとラケルの子であり、彼には同じ母から生まれた弟ベニヤミンがいた。兄たちはレア（ラケルの姉）、またラケルの召使ビルハ及びレアの召使ジルバとヤコブの間の子でも、ヨセフにとっては異母兄だった。父イスラエル（ヤコブを指す別名）は、ヨセフが年寄り子だったので、彼を兄たちよりもかわいがり、彼には特別裾の長い晴れ着を作ってやった。これは高貴な人が着る衣服で、腕の先、また足のくるぶしまで覆うものだった。ヤコブの偏愛の象徴であったこの晴れ着が、異母兄たちの憎しみをかう原因になった。複雑な家庭環境と父ヤコブのヨセフに対する偏愛がこの物語の背景にある。

ヨセフが見た二つの夢も兄たちの憎しみを増した。畑でヨセフの束がまっすぐに立った時、兄たちの束がその束の周りに集まってきて、ヨセフの束にひれ伏した。また太陽と月と十一の星がヨセフにひれ伏した。これらが単なる夢ではなく、神が将来ヤコブの家族に起こることを、夢を通して啓示されたことは後に明らかになる。

〈エジプトへ売られたヨセフ（37:12～36）〉

ある日ヨセフはヤコブの言いつけで、羊を飼っている兄たちの様子を見るために家をあとにした。ドタンにいた兄たちが遠くからヨセフを見つけたとき、日ごろから心にあった憎悪が一気に噴出した。「あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。……あれの夢がどうなるか、見てやろう」（20）との言葉から、彼らが、ヨセフの夢が単なる夢ではないと感じていたこと、またその夢の実現を阻む目的で殺そうとしたことがわかる。長兄ルベンがヨセフを殺す計画に反対した。彼は、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったからである（22b）。兄たちはヨセフの晴れ着をはぎとり、穴の中に投げ入れた。彼を奴隷として売ることをユダが提案した。それでイシマエル人によってエジプトに連れ去られ、ファラオの宮廷の役人、ポティファルに売られ、彼の奴隷となった。

兄たちは父ヤコブを欺くために、ヨセフが死んだように見せかけようとして、雄山羊を殺して彼の晴れ着に塗り、家に帰ってヤコブに見せた。ヤコブは、ヨセフが野獣にかみ殺されてしまったと思い、悲しみ嘆いた。この悲しみは、ヨセフがエジプトで生きていることを聞くまで続いたと思われる。ヤコブはかつて兄エサウから長子の特権を奪うために、子山羊の肉と毛皮で父イサクを欺いた（27:15～17）。いま彼は雄山羊の血によって息子たちに欺かれることになる。

ヤコブの家族間の確執はまさに罪深い人間の姿そのものである。しかし神は、人間の悪意や小賢しい知恵を超えて、ご自分のご計画を歴史をとおして間違いなく遂行される全能者であられる。ヨセフは波乱万丈の人生をとおして、器として整えられていき、神の救いの歴史の中で大きく用いられた。私たちが神の御手にゆだね信仰によって歩むならば、神のご計画のなかで用いていただける。

（後藤公子）

テキスト 創世記 37章1～36節
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11, 13

〔単元のねらい〕

神様の救いの歴史を子どもたちと共にたどりたい。神様の救いの歴史の中にヨセフ物語、特にヨセフの苦難を位置付けると、それは、今日の子どもたちに対してどのようなメッセージを発信するようになるのかを考えたい。苦しみは悪であると考えられがちな世の中で、このヨセフ物語の学びを通じて、神様の子どもに与えられる苦しみが、ついには神様の子どもへの救いにとって神様にあって善とされるという摂理の信仰が養われればと願う。

「神さまのお約束が実現するために」

愛する子どもたち、おはようございます。

暑い毎日ですが、元気ですか。今週も、みんなの心と体が神さまによって守られますように。

ところで、先生は、聖書を読むとき、つくづく思うことがあります。本当に神さまって、すごいなあ！と。だって、先生なんか、歳のせいでしょうか？きのう、誰かと約束したことも、今日になったら、その約束をもう忘れてしまっていることが多いのです。しかし、神さまは違いますね。何千年もの昔になされたお約束をちゃんとおぼえていらして、まさかと思うようなことを用いられて、お約束を果たされるからです。その一番の例が、最初の人間アダムさんとエバさんが罪を犯して、神さまに背いてしまったすぐ後で、二人を誘惑した蛇、悪魔を裁かれる中で、お約束して下さったこと、つまり、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創世記3:15）、そうです、全世界の救い主を送るというお約束ですね。神さまは、何千年とかけて、このお約束の内容をもっとはっきりとなさって、少しずつ実現するようになされたわけです。

さあ、神さまは、このお約束を実現なさるために、世界中のたくさんの人の中から、たった一人、まずアブラハムさんをお選びになって、そのアブラハムさんからイサクさん、そして、ヤコブさんへと続く血筋を選ばれました。きょうからは、そ

のヤコブさんの11番目の息子、ヨセフさんのお話となりますが、実は、神さまは、ヨセフさんのひいおじいさんのアブラハムさんにこんなお約束をなさっておられたのです。「主はアブラムに言われた。『よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである』（創世記15:13～16）。アブラハムさんの子孫が、どこかの国で四百年の間奴隷になるというお約束ですが、アブラハムさんの子孫にとっては、奴隷になることなんか、とても大変なことで、嫌なことです。しかし、神さまは、全世界の救い主を送るために絶対に必要なこととして、このようなお約束をなさったわけです。そして、いよいよ、ヨセフさんの時になって、このお約束が実現へと向かうようになったのです。しかし、誰も、そんなことは夢にも思っていないませんでした。また、私たちも、今朝の聖書箇所だけを読むならば、そのように話が進んで行くなんて思うことができません。だって、ここに書いてあることは、ヨセフさんにとっては、本当に災難だからです。

ヨセフさんが17歳の時のことでした。ヨセフさんのお仕事は、お兄さんたちと一緒に羊のお世話をするものでした。ところで、ヨセフさんは、ヤコブさんが歳を取ってから生まれた子どもだったので、お父さんにとてもかわいがられたのでした。それで、お兄さんたちは、弟が嫌いでたまりませんでした。また、ヨセフさんは、ヨセフさんで、お兄さんたちのことをお父さんにいちいち告げ口していましたから、そのことでも、お兄さんたちは、ヨセフさんのことが嫌いで嫌いでたまらなかつたことでしょう。そんなヨセフさんの態度からだと、これから起こることは、まったく予想できない災難ではなく、自分でまいた種が原因と言えるかも知れませんね。

ある日、お兄さんたちの憎しみが殺意へと変わることが起こったのです。ヨセフさん、妙な夢を見ました。畑で、お兄さんたちの束が、ヨセフさんの束にひれ伏したり、太陽と月と11の星が、ヨセフさんにひれ伏したりする夢です。お兄さんたちは、その夢のことを聞いて、何を意味しているのか、ピーンと来ました。お兄さんたちが、そればかりか、お父さん、お母さんも、ヨセフさんにひれ伏すということです。お兄さんたちは、この夢のことを聞いて、はらわたがにえくりかえるようでした。そして、ついにヨセフさんを殺して、野原の穴に放り込んで、お父さんには、野獣に喰い殺されたと報告しようと相談しました。しかし、長男のルベンさん、四男のユダさんは、ヨセフさんを殺すことに反対しましたから、ヨセフさんは殺されずに、生きたまま、野原の穴に放り込まれてしまいました。後になって、長男のルベンさんが、ヨセフさんを穴から助けようとして穴の所に行つたのですが、もう既にヨセフさんは奴隷とし

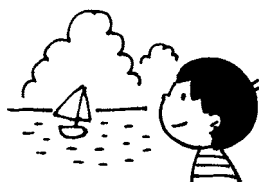
て売られて、エジプトに連れて行かれてしまっていたのでした。

エジプトへと連れて行かれたヨセフさんは、その後、どうなったのかというと、エジプトの王様にお仕えするお役人、ポティファルさんの奴隷となりました。ポティファルさんは、侍従長ですから、王様にお仕えするお役人の中でも一番偉い人です。そういう人の奴隷となったわけです。

さて、こうして、ヨセフさん、エジプトで、たった一人、奴隷としての生活を始めたのですが、当然、ヨセフさんは、神さまのお約束のために自分が用いられているなんて、夢にも思っていませんでした。もしかしたら、お兄さんたちに穴に突き落とされた時から、「神さま、どうして、一緒にいてくださるはずなのに、わたしを守ってくださらなかったのですか!」と、神さまに何度も何度も訴えていたかもしれません。しかし、決して、神さまは、ヨセフさんから遠く離れてしまわれたわけではありませんでした。神さまがヨセフさんといつも一緒だったからこそ、お兄さんたちに穴に突き落とされて、奴隷としてエジプトに連れて行かれ、エジプトの王様の侍従長ポティファルにお仕えするようになったのでした。すべては、ヨセフさんと一緒におられる神さまのお導きによることでした。神さまは、ヨセフさんの災難をも、ヨセフさん自身にとって、さらにはヨセフさんの家族のみんなにとって、さらには今の私たちにとって、ためになる善いこととしてくださったのです。全世界の救い主イエス様を送るために絶対に必要な準備としてくださったのです。この世界と時間のすべてをお考えのままにご支配なさる、神さまを心から賛美しましょう。(長谷川潤)

〔今週の暗唱聖句〕 コリントの信徒への手紙 二 1章20節

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。



〈ねらい〉

ドラマチックなヨセフ物語のはじまりです。神さまがどんな時も守ってくださることを覚えて祈れたらと思います。

〈暗唱聖句〉

「父はこう言って、ヨセフのために泣いた」。

〈展開例〉

①ヤコブさんには12人の息子がいました。その中でもヨセフは年をとってからの子だったので、どの兄弟よりもかわいがりました。でも、兄たちにはそれがとても憎らしく、ヨセフとは話もしたくないと思っていました。そんなある日、ヨセフは兄たちに夢の話をしました。

②「兄さん、兄さん。私の夢話を聞いてください。畑で私たちが束を結わえていると、突然私の束が起き上がり、兄さんたちの束がわたしの束の前に来てひれ伏しました」。それを聞いた兄たちは、もうかんかんです。「なに、お前が私たちの王になって、お前にひれ伏すというのか」。兄たちはヨセフをますます憎みました。

③また別の夢を見たときはヤコブさんにも話をしました。「お父さん、太陽と月と11の星が私にひれ伏している夢を見ました」。ヤコブさんは、ヤコブをしかりましたが、このことを心に留めました。

④ある日、遠くまで羊の群れを飼っていた兄たちの様子を知らうと、ヤコブはヨセフに見てきてくれと頼みました。ヨセフは言われたとおり、兄たちのいるところまでやってきました。

⑤「あれはヨセフじゃないか。また我々を馬鹿に

するためにやってきたのか。いっそのこと殺してしまおう。そしてあれの夢がどうなるか、見てやろう。どうだ」。兄たちは相談しました。

⑥しかし、長男のルベンがヨセフを助けようとして言いました。「私たちが殺すのはよそう。それより、この井戸の投げ込んでしまったらどうだ」。他の兄たちもこの意見に賛成しました。彼らはヨセフがやってくると、服を剥ぎ取り、井戸の中に投げ込みました。でもルベンは、後できて助け出そうと思っていたのでした。

⑦しかし、兄たちが食事をしている間に、井戸を通りかかった商人たちがヨセフを井戸から引き上げ、エジプトに売り飛ばしてしまったのです。ルベンはヨセフがいなくなること気づくと嘆きました。兄弟たちは自分たちのしたことを隠そうと、ヨセフの服をやぎの血で染めて、父のところに持って行って、「この服は多分ヨセフのだと思いますけれども、きっと野獣に襲われたのです」と言いました。

⑧ヤコブは悲しみのあまり自分の着ている服を引き裂き、「私もあのところへ行く」と言って、ヨセフのために毎日泣きました。この後、エジプトに売られたヨセフさんはどうなるのでしょうか。またヤコブさんの悲しみはいやされないのでしょうか。大丈夫。神さまはヨセフさんと一緒におられます。それに神さまを信じる人が悲しんでいるのを神さまは必ずいやしてください。

〈お祈り〉

天の神さま。どうかヨセフさんをお守りください。そして悲しんでいるヤコブさんをお守りください。そして私たちもお守りください。アーメン。



〈ねらい〉

神様のご支配に信頼する。

〈はじめに〉

夏休みも一ヶ月が過ぎました。夏休みの間のこのクラスはいかがでしたか？ 暑い中で分級の尊いご奉仕を感謝します。小学校は夏休みがありますが、日曜学校にはお休みはありません。欧米の教会ではお休みもあつたりしますが。教えるという奉仕にお休みはありませんが、奉仕者のリフレッシュを必要に覚えます。奉仕者同志、祈りに覚え、支え合い、教え合い、お互いに気遣いあいましょう。

〈御言葉に聴きましょう〉

- ①ヨセフは、お父さんヤコブからかわいがられていましたか。
- ②ヨセフさんはどんな服を着ていましたか。
- ③他の兄弟のお兄さんたちは、ヨセフさんのことが好きでしたか。
- ④それは、なぜでしょうか。

〈展開例〉

アブラハムさん、イサクさん、そしてヤコブさんと旧約のお話がずっと続いています。私たちには、聖書が与えられていますから、一人ひとりが神様からどんな道を歩まされてきたか、全部知ることが出来ます。この先、この人にどんなことが起きるのか、どうしたのか、どんな失敗をしたのか、どんないいことがあったのか。

でも、今の私たちは、自分の明日のこと、一週間先のこと、一年先のこと未来のこと、何が起こ

るのか、自分はどうなるのか確かなことはわかりませんね。だから先のことを心配に思ったり、何でもこんなことがあるんだろうと悩んだりします。

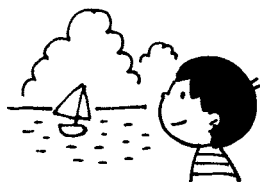
今日のヨセフさんもそうです。ヨセフさんは17歳でした。みなさんより大きいですね。兄弟が上に10人、そして弟が一人いたので、全部で12人でした。でもお父さんヤコブが随分年をとってから生まれたヨセフさんはとてもとてもヤコブさんが大切にかわいがっていました。ほかの子どもたちを嫌っているわけではありません。でもヨセフさんは特別扱いだったのです。当然、上のお兄さんは面白くありませんよね。いつかいつか、ヨセフさんをやっつけてやろうと思ってました。

ある日、ヨセフさんは不思議な夢を見て、そのことをお兄さんに話しました。その夢の内容は、お兄さんたちの心をますます怒らせるような内容で、ヨセフさんにみんながひれ伏すというものでした。お兄さんたちの怒りは頂点で、とうとう、殺しはしませんでした。ヨセフさんを穴に突き落として、お父さんにはヨセフさんは動物に襲われたという、うその報告をしました。ヤコブさんの悲しみはどれほどだったでしょう。

ヨセフさんは、通りすがりのミディアン人に引き上げられエジプトに奴隷として売られてしまいました。でもヨセフさんはエジプトで一生懸命働きました。神様なぜこんな目にあうのですか、とヨセフさんは悲しい時もあったかもしれませんが。でもこれには、深い深い神様の救いのご計画があったのです。私たちにはすぐには分からないことでも、すべてご存知の神様が私の神様だということを知りましょう。

〈お祈り〉

私に神様を信頼する信仰を与えてください。



〈ねらい①〉

聖書において、神の摂理を教える最大のテキストはヨセフ物語ですが、その「教え」を抽出・精錬して生み出された箴言の言葉は、子どもたちにも必ずや深い印象を残すカテキスムです。

〈展開例①〉

人の歩む道は主の御目の前にある。

その道を主はすべて計っておられる。

(箴言5:21)

主は御旨にそってすべてのことをされる。

逆らう者をも災いの日のために造られる。

(箴言16:4)

人間の心は自分の道を計画する。

主が一步一步を備えてくださる。

(箴言16:9)

くじはひざの上に投げるが

ふさわしい定めはすべて主から与えられる。

(箴言16:33)

人の一步一步を定めるのは主である。

人は自らの道について何を理解しようか。

(箴言20:24)

〈ねらい②〉

「すべてのことに意味がある」と信じて生きる、信仰者の根源的な幸いを伝える。

〈展開例②〉

お兄さんたちの悪だくらみによって、エジプトに連れて行かれてしまったヨセフさん。かわいそうだね。エジプトでも色んな大変なことがありますが、やがて王様に気に入られてヨセフさんが総理大臣になっていくという、とってもスケールの大きなお話が、この後に続きます。でもね、お話はそれで終りではありません。ヨセフさんの後、イスラエルの人たちはエジプトに住むようになりますが、やがてエジプトのファラオから憎まれて、

奴隷として追いつめられて苦しみの叫びをあげます。そこに登場するのがモーセです。モーセさんによってエジプトから脱出するという救いの大きな物語が続くわけです。さらに言えば、それだけじゃないよ。その後カナンの地で、ダビデ王が王国を築き、そしてそのダビデの家からやがてイエス様という救い主が与えられます。そこが救いのご計画のクライマックスです。そう考えると、今日聞いたお話は、まだまだ始まりの始まりだね。

でもこの始まりの始まりからもうすでに、神様はすべてのことを考えつくして用意しておられました。お兄さんたちの悪だくらみによってヨセフさんはエジプトに連れて行かれてしまいましたが、でもこの出来事がなければ、その後の大きな物語は起こらないのです。それは偶然ではなく、神様が定めておられたことです。

このヨセフ物語には神様が直接登場なさることはありません。でもその大きな手がすべてを包んでいます。私たちの人生にも、神様が直接登場なさって、言葉を与えてくださることなどまずありません。でもいつでも神様は、私たちを見ていてくださって、すべてを用意していただきます。私たちの人生に起こるすべてのことには意味があります。その意味は、神様が知っておられます。私たちの思いをこえて、神様は、終りの時の神の国の完成に向けて、大きな救いの物語を進めておられます。そのために必要な一つひとつのことを、私たちのために定めてくださっています。ヨセフが味わったような、痛みや辛さを味わうこともあるでしょう。でもすべては、大きな物語の完成(私たちの救いの完成)のために、意味のあることなのです。

〈祈り〉

神様、あなたのもとで、すべてのことに意味があると信じる幸いを、もっと教えてください。

〈ねらい〉

歴史を支配される神様の摂理のスケールの大きさを覚える。

〈展開例〉

Q. 皆は「自分は一体、何をするために生まれて来たんだろう」、こんな疑問を感じたことはないだろうか。思春期というのは、こういうでっかい謎が気になったりする時期だと思う。むしろ、自分の一生について時間をかけて考えられる今の時期に思う存分考えて欲しい。みんなは中学生なりに色んなことをしながら自分を探していると思う。学校の課題。塾のノルマ。部活に習いごと。恋愛、友だち。色々あると思うが、じゃあ、君は勉強するために生まれて来たのか？ 部活をするために生まれて来たのか？ 習い事をするために生まれて来たのか？ 恋愛のために生まれて来たのか。抱えているモノは人それぞれ。とはいえ、今の君たちはまだ何者でもないように感じるかもしれない。

① 今日から始まったヨセフ物語には様々な人たちが登場するが、神様はそうした色々な人の、色々な人生を用いて、神様が約束を実現されていく様子をヨセフの人生に現わされる。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そして、これらの人たちと一緒に時代を生きた数限りない人たち。こうした人たちがそれぞれに生きて、神様の約束が少しずつ実現していく。神様はこういう仕方、一人の一生だけでなく、世界が始まってから完成するまでの「歴史」というめっちゃめっちゃ規模のでかいモノを、御自分の計画に従って整えて、導いていく。そんな中で君たちは何のために生まれてきたのか。具体的な形はこれから少しずつ形づくれば良い。ただ、今日覚えて欲しいのは君の人生には間違いなく「何かのため」

という目的と意味があるということ。そして、いつかその目的のために存分に力を発揮するために、皆の「今」には図りきれない意味がある。

② ヨセフは一見、苦しみのだん底のような人生を送る。家族との別離。兄弟からの憎悪。奴隷という束縛。しかし、ヨセフの苦しみは自分の一族すべて、さらにはエジプトという当時のトップ大国全体を救いへと導くために必要な苦しみであった。ヨセフの若い時の苦しみは、ヨセフ自身の未来のため、エジプトという大きな社会が祝福されるため、そして、ヨセフの後の人々の救いという今後の歴史のため、その歴史を導かれる神様のために無くてはならないものであった。

③ 君が何をするために生まれて来たのか。それは他人にはわからない。でも、君の人生はヨセフを導き、歴史を導く神様の愛の眼差しの内にある。君は自分のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は、社会のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は神様が世界を祝福へと導くその立役者となるために生まれて来た。君はたまたま生まれた、いてもいなくても同じな、そんな空しい存在ではない。君が生まれるのは、この時代の、この国でなくてはならなかった。

君は世界や社会の中でちっぽけな存在ではない。君は広大な世界と壮大な歴史を舞台に飛び回る神様が選り出したメインキャストである。神様の目線で自分を見つめるとき、自分という存在は、自分が思う以上にかけがえのない存在であるということを感じて欲しい。

〈祈り〉

世界と時間を導く神様、あなたの創られるこの世界で生きられることを感謝します。アーメン。